

ドクター赤座の泌尿器がん（前立腺がん、膀胱がん、腎がんなど）・カフェ講座を開催しました

5月19日、6月16日、7月14日の3回シリーズで、当研究室主催で泌尿器がん・カフェ講座を行いました。講師は、当研究室の赤座英之特任教授。泌尿器系のがんが気になる50歳以上の人を対象に募集したところ、30名の当初定員を大幅に超えるお申し込みがあり、その多くが泌尿器系のがんの経験者・治療中の方。急ぎよ定員を増やして50名の参加者で盛況のうちに終わりました。

この講座の特徴の一つは、個別のがんに特化せず「泌尿器のがん」というくりで行ったことです。泌尿器系のがんの特徴ともいえるのは、治療を行う医療機関の体制、治療選択とダイレクトにつながるQOL(生活の質)、病気と長く付き合うことになる人が多いなど、「がんと共に生きる」ことを患者と医師がともに模索していくことです。

講義は、以下のテーマで各回行われ、膀胱がんの膀胱がん温存療法、前立腺がんの内分泌療法、そして、腎がんの分子標的薬開発などの最新情報とともに、どのような治療選択ができるのか、可能なのか、これから可能になるうとしているのかが話されました。

- 第1回 いま泌尿器がんが注目されている
- 第2回 膀胱がん・腎細胞がんの最新情報
- 第3回 前立腺がんの最新情報／がんとともに生きる時代に向けて

講座では、泌尿器系のがん全般の話を踏まえて個別のがんについての講義を行い、さらに「がんと共に生きる時代に向けて」として、医師と患者がともに治療を考える、主体を患者においた医療のあり方を考えました。



もう一つのこの講座の特徴は、講義後に会場を移して、カフェ形式のグループトークを行ったことです。講義で提供された泌尿器系のがんの最新情報を受け、男女別に7つのグループに分かれ、カフェコーナーに用意した飲み物と茶菓子をセルフサービスで手元に、お茶を飲みながら講義の内容の振り返り、参加者自身や家族のがんのこと、気になることなどを話してもらいました。また、赤座教授への質問もグループごとに話し合ってもらい、グループ単位で質問を出してもらいました。



参加者は初対面同士。グループトークでは、最初はお互い様子を見つつという雰囲気もありましたが、がん経験者が多かった今回の参加者。すぐにお互いの経験や状況を話し合う中で、互いの共通点、相違点からさまざまに話が弾んでいる様子が見られました。グループトーク中は赤座教授も会場を回り、参加者と交流をしました。

講座に参加して一言も話さずに会場を後にするのではなく、カフェという雰囲気を媒介に、講義による学びと参加者同士、そして講師である医師と参加者の交流を図るのがこのカフェ講座の狙いでもあります。講義は最新情報がふんだんで、難易度は決して低くないのですが、その講義の内容を複数で自身や家族の状況にひきつけて話をするすることで、理解を促し、主体的にがんの予防や治療、再発防止を考えることにつながる。それがひいては、患者主体の医療、患者と医師がともにつくる医療につながる。そういうことを予感させるグループトークとなりました。

グループトークの後は、グループごとに赤座教授への質問を発表。すべての発表後に赤座教授がまとめて参加者の疑問・質問に答えました。質問によって、講義で概括的に触れられた内容が、参加者の関心によって具体的に深められていきました。講義の時間以上に、参加者も熱が入り、熱心にメモを取ったり聞き入ったりしていました。また、質問への答えを受けて、さらに会場との質疑が続き、3回とも予定時間を大幅に超えて質疑の時間が続きました。

特に関心が高かったのは、セカンドオピニオンについてです。主治医にセカンドオピニオンを聞きに行きたいと伝えて良い顔をしてもらえなかった経験がある人、それを考えて言えなかった人など、より良い治療選択をしていくために必要でも、なかなか難しい状況があります。赤座教授から、セカンドオピニオンは患者の当然の権利であること、主治医はそれを快く認めなければならないという話を聞き、考えを新たにした参加者もいたようです。また、治療後の後遺症上に悩んでいる参加者、再発の不安を抱えている参加者も多く、泌尿器系のがんの治療が、いかに生活の質に直結しているかを再認識する場ともなりました。



全3回の講座を終えて、参加者からは、もっとグループトークの時間がほしい、今後も同じような講座をしてほしいといった要望も寄せられました。3回目は、講座終了後も残って話し込む参加者の姿があり、座学だけではないカフェ講座という形が、さまざまな交流につながりました。また、主催者側も、参加者から多くのことを学ぶ機会となりました。